帰路

第四話　白備の帰宅

雀達の囀りに僕は目を覚ます。頭が痛い。内側から鉄球で殴られているような感覚に襲われる。

その今にも割れそうな頭を抑え、僕は憚りへ向かう。十中八九、吐く。せめて憚りへ行って吐いてこよう。

僕はそう思い、朝支度を手伝う下男に言いつけて部屋を出た。

「おはーよござーまっ！」

「違う違う、もうちょっとこう、ございますー」

「感じで…」

庭に差し掛かると早速、子猛が鈴に言葉の指導しているようだった。側には明鈴、そして若い下女の玉香が居た。なるほど、外でやれば変な煙は立たないということか。しかし頭痛が酷い。

起き上がったことによりさらに痛みを増している。いかん、これ以上は何も考えられん。僕は再び歩き出した。

すると子猛が此方に気づいて駆け寄ってきた。

「おいおい、二日酔いか？あれぐらいでだらしない」

僕は歩みを止めず顔を向けず応える。

「うるさい…。僕はずっと勉学をしていた身だ…お前のように毎日毎日…」

突如、吐き気を催し、胸が苦しくなり膝をついた。子猛はあわてて僕の背中をさする。

僕は横目に鈴を見た。

あいつは驚いて立ち上がり左顧右眄した後、何処かへと走り去ってしまった。それを明鈴

と玉香追いかける。
逃げ足の速いやつめ。僕は袖で口の周りを拭き立ち上がる。
「おいおい、無理すんなよ。とりあえず水だな…おーい！水を持ってきてくれ！」
子猛がそう叫ぶ。
誰かが応えてくれたようだが、僕には待つ余裕などない。立ち上がって憚りへと歩き出す。
無論、子猛はそんな僕を止めようとするが、僕は応じなかった。
「すまん、憚りに行って吐いてくる」
そう伝えるとなにやら小走りする音が此方にやってくる。
足を止め振り返ればそれは鈴だった。やがて僕のところまで来ると、止まって何かを差し出してきた。
息も絶え絶えにそれを見るとそれは盃。水が入っているようだ。僕はそれと彼女を交互に見た。そしてそれを彼女の手から取り、一気に飲み干す。焼けた喉が生き返るようだった。
そして盃を彼女に渡し、僕は進路を戻す。
「もういいよ鈴ちゃん、別の場所で続きしよう。いくぞ、明鈴、玉香」
そんな子猛の声が遠くから聞こえてきた。

―気が利くではないかあの娘。

あれから大分落ち着いた僕は、顔を洗って普段着に着替た。下男に顔を洗った水を下げさせ、僕は行李の中に昨日読んでいた本を入れた。

来月から僕は都での生活に戻る。無論、①郷試の際に半年ほど滞在した。だが、その時は会試まで三年の歳月があり、尚且つお婆様が帰ってきて欲しいと懇願したので、この済州に帰ってきたのだ。

そんなお婆様も、昨年お亡くなり遊ばしてしまった。会試に合格した暁には、向こうでの仕事が待っている。ここに帰ってくる義理はない。

十年間の少年時代をここで過ごした僕にとって、確かに少々寂しいという気持ちはあるが、何の為に僕は今まで勉学をしてきたのか。それを考えると前へと進むしかない。

僕は窓の近くに椅子を持ってきて外の池を眺める。水辺に咲いている梅の花はほとんど散ってしまっていた。

しかし、様見ろ都の雌豚ども。この白里は官僚となり貴様らとは違う世界に住む。もしも貴様らを嫁にもらう男がいても、本質を見極めることの出来ない馬鹿か色好きだろう。せいぜい嫉妬に狂う毎日を送るがいいさ。

僕は大きく息をつく。すると部屋の扉を叩くものがあった。

「誰だ」

「徳竜兄さん、私です。備です」

「おお！入れ入れ」

備と名乗った男、之は僕より五つ下の白備、字を孝文という。わが父白維の弟であり、この済州の家の主・白仁叔父様の息子で僕とは従兄弟の間柄だ。この地方の文官を務めており、ここ二日間は上司の家に呼ばれて留守であった。

平均的な体つきで、本人には似合わない髭を蓄えている。童顔で、髭を剃れば秀麗の文人であるのだが、本人は髭を伸ばしたがっているのだ。以前、僕は似合わないから剃れと赤裸々にいった事があったが、頑として剃り落とそうとはしなかった。見た目がおっとりしているのに中々芯の強い男、それが備だ。

僕は彼に椅子を勧めて対面した。

「どうだった？崔所長のお宅は」

「豪華な邸宅でしたよ。沢山のご馳走まで出してくれて…」

「崔さんは、部下に優しい好漢だと聞いていたが、嘘ではないらしいな」

「本当に器の大きい方ですよ」

「崔さんにお前のお父上に私に…本当、将来安泰だな、備」

「あはは、兄さんにそういわれちゃあ敵わないなぁ…」

と、彼は頭を掻く。すると、何かを思い出した顔つきで僕のほうに向き直る。

「そういえば兄さん、今日は子猛大兄さんが着ていらっしゃいますけど…」

「あぁ、娘も一緒にいただろう」

「えぇ…この辺では見ない娘でしたけど…兄さん、ご存知なんですか？」

「無論、私が拾ってきたのだからな」

備は僕の何気ない一言に、驚きを隠せないようだ。目が丸い。
「兄さん、子猛大兄さん、の間違いですよね？」
「いや、この私が拾った」
「でも兄さんは女子が……」
彼はハッとして、その続きの言葉を憚った。僕はここぞ種明かしといわんばかりに彼に話す。
「聞け、備。私は確かに女子が憎い。だが、あの娘は只の娘ではない。異国の娘なのだ。それも私も僕の父上も知らない国の。どうだ、すごいやつを拾ってきただろう」
「ほ、本当ですか！」
「私が馬鹿らしいことを口にするものか」
「それは珍しいや！異国の女子なんて！衣は『天衣無縫』でしたか？日は碧色でしたか？」
備は興奮して様々なことを聞いてくる。その子供らしさは何処か鈴に通じるものがあった。僕は苦笑する。
「ははは、落ち着け。天衣無縫とまでは行かぬが、肌を見せる下品な胡姫の衣だった。目はわれわれと同じ黒。そうやって質問するより実物を見たほうがいいだろう。子猛のところに行くぞ」
そういって椅子から立ち上がり、僕は備を引き連れて部屋を出て庭へ向かった。もう日は高く上がっており、春の陽気が仄かに漂う。
「ごめーなさーい！」
「そそ、そんな感じだ！やればできるじゃねーか！」
すると二人はまだまだやっていた。備はこっ

そり物陰から覗いている。僕はそんな備の背中を叩き、表へと出した。

②昔からの尊い教えに背くが、鈴を女と見なし、扱うのが僕には億劫だった。

そして、僕らは二人の座っている近くの席にお邪魔する。

「やぁ、熊殺しの趙先生。順調ですかな？」

「おぉ、熊逃げの白先生。順調そのものですよ」

とお互いにふざけ合った。備も子猛に軽く挨拶をすると、すぐさま鈴に振り向いた。

「私は白備、あなたのお名前は？」

「あなたの…なーめ……え、ぁ…あぁ！私は鈴！鈴でしゅ！」

「鈴か。私のことは孝文と呼んでいいよ」

「こーぶん？」

「そうそう、孝文」

「ありがとー、こーぶんさん」

その突拍子なところで出た『ありがとう』に、僕と子猛は腹を抱えて笑う。鈴は恥ずかしがって顔を真っ赤にし、共に笑った。

只一人、孝文のみが笑わずにずっと鈴に見入る。

「おいおい、どうした？そんなに見入って。そんなに美しい娘でもあるまい」

子猛、まだ笑いの余韻のある中、備に問いかける。すると備はいや、と笑顔で振り返った。

「…この娘、本当に只の異国の娘なのかなぁって…とても、気品があるというか…」

「なんだぁ？女さえも知らない考文が何ほざいてんだ？あぁ？」

「ち、ちょっと！子猛大兄さん！」

備は頬を染め、机に手をつき立ち上がり懸命に否定する。僕はそれを聞いてさらに笑う。

備が女と全く縁がないことを、子猛も知っているのでからかっているのだ。

「もう、兄さん達はそうやっていつも私をからかう…やめて下さいよ！」

「わりぃわりぃ。しかし、鈴ちゃんは、伊達に字は書けねぇぜ。すぐに言葉を覚えやがる」

子猛はいつの間にか笑いを終え、感心した顔で彼女の頭を撫でる。鈴は肩をすくめて上目遣いで僕らの顔をそれぞれ見る。

「怖がることねぇよ、こいつらみんなお前の味方だからよ」

そういって子猛は歯を見せて笑った。鈴はよく分からないゆえに、こくりと頷くのみ。

その後、僕達は日が暮れるまで鈴の言葉の指導を共に励んだ。

本日覚えた単語はおはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとう、ごめんなさい、そして自己紹介の仕方や名前を聞く時の決まり文句など日常でやり取りできる程度のものであった。

その夜、静かに部屋で酒を飲んでいると、備が訪ねてきた。
「まぁ、とりあえずお前も酒を飲め」
「ありがとうございます、兄さん」
そういって盃を彼に渡し、注いでやる。
「お前とも、あと少しでお別れだな」
「えぇ、寂しくなります」
その言葉の後、しばらく僕らの間には沈黙が流れた。不気味に静かだ。
彼は済州に着たばかりの僕の不安を真っ先に解いた人物でもあり、互いに心を許す間柄だった。そんな彼とも離れるだなんて、非常に寂しい。
外に目をやると、吸い込まれてしまうのではないかと思うほどの闇が支配していた。
僕は視線を戻し、己の盃に酒を注ぐ。
「いかんな、最近酒を飲んでばかりだ。昨晩は飲みすぎて二日酔いはするわ…少しは自重せねばな」
「あの、兄さん、鈴のことなんですが…」
「あぁ」
「あの娘を都へ連れてゆくおつもりですか？」
そう真剣な目をして僕に尋ねた。
「いや、置いて行くつもりだが。よもや私の妻でもあるまいし」
「そうですか。いや、ちょっとそのことだけ気になったので…」
と備は笑う。
「なんだ、気に入ったのか」
「えぇ。言ってしまえば」
僕は一瞬全身が石になったような、冷たい感覚に襲われた。すると備は慌てて両手を己

が胸の前まであげ、横に振り出した。
「あ、いや！別に妻にしたいとか、囲いたいとかそういう意味じゃなくてですね…」
聞いてもいないことに慌てて手を振って否定する彼に僕は笑った。
「何かあるのか？遠慮なく言ってみろ」
「あはは、すみません。本当にそれだけですよ。それよりも兄上、飲み直しましょう」
そういって備は僕の盃に酌をする。僕はそれから鈴の世話などを備に頼み、注いでもらった酒を飲み干した。
先ほど感じた石になったような感覚はなんだったのであろうか。僕はそのことに疑問を感じつつも、備とともに飲み明かした。
部屋に流れてくる風が温かくなってきている。もうすぐ春なのだな。僕は暦を他所に、肌に当たって通り過ぎてゆく風でそう感じた。

①郷試…科挙の筆記試験のこと。
②昔からの尊い教え…『礼記』の「内則」に「七年男女、不同席、不共食」とあり、七歳にもなれば男女の区別を正しくつけなければならないとする考え。